

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月26日実施)	総合評価（3月25日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	・生徒の柔軟な学びに配慮した教育課程により、個別最適な学びを学校全体で推進 ・誰一人取り残すことなく、多様な教育ニーズに即した支援の充実	○令和7年度、オンライン学習を導入するためオンラインレポートやオンラインスクリーリングの実施に向けて、教科内及び学校全体で取り組む。 ○活動率を高めるための最適策を模索し、全ての生徒へ学習支援や連絡・相談体制が取れるよう学務グループなどが中心となり、学校全体で工夫し、単位修得に結びつけるよう努力する。	(1)オンライン学習の導入に向け、修悠館マイページの利活用を全生徒に周知させ、動画を含む学習コンテンツ等学習支援体制のさらなる充実を図る。 (2)非活動生を無くすため、履修登録や受講手続きの方法を模索し、全生徒が活動生となり、一人ひとりに最適な学習支援を各方面からできるよう学務グループなどが中心となり、学校全体で工夫し、単位修得に結びつけるよう努力する。	(1)オンラインレポートの作成に当たり、教員の添削作業効率の低下や生徒の作業ストレスの増大などに起因するレポート提出率の低下を招かぬよう学習支援体制を構築できたか。 (2)全生徒が活動生となる方策を構築し、生徒間の格差を、担任だけではなく、教科担当者、担当グループなど学校全体で連携をし、単位修得に結びつけることできることを整える。	(1)オンラインレポートに関する一連の流れを、すべての教科で試行し、問題・課題等を整理し、システム開発者と共にシステム改修につなげた。 (2)受講料、諸会費の支払いのキャッシュレス化によって活動率の低下を招かぬよう、わかりやすい案内を行うとともに、キャッシュレス化に対応できない生徒には、現金での支払い等の対応ができるよう体制を整える。	(1)次年度からのオンラインレポートの開始に向けて、レポート提出率の低下を招かぬよう、わかりやすい生徒用マニュアルを作成するとともに、オンラインレポート操作説明会等のガイダンスを充実させる。 (2)支払方法の変更によって活動率の低下を招かぬよう、わかりやすい案内を行うとともに、キャッシュレス化に対応できない生徒には、現金での支払い等の対応ができるよう体制を整える。	(1)導入して最初の1年はレポート提出率は下がる懸念があるが、できるだけ減少が抑えられるように頑張ってほしい。「やりたいけど方法がわからない」という生徒への対応をしっかりとお願いしたい。「デジタルシチズンシップ教育」をぜひ行ってほしい。デジタルネイティブがどのような社会性を身に付けていくのかが重要になってくる。生徒に情報を得る力や判断する力を養ってほしい。	(1)令和7年度からのオンラインレポート実施に向けて、担当グループが中心となって、学校全体で組織的に準備を進めることができた。特に、オンラインレポートに関する一連の流れを、すべての教科で試行した際は、各教科の要望を丁寧に聞き取り、システム開発者と共にシステム改修につなげることで、教員、生徒の作業ストレスを最小限とするシステムが確立できた。令和7年度は、利用開始までのガイダンス及び利用開始してからのフォローを丁寧に行う必要がある。 (2)受講料、諸会費の支払い方法を現金徴収からキャッシュレスに変更した。キャッシュレス化によって活動率の低下を招かぬよう、各家庭への丁寧な対応が必要である。	(1)視覚効果を活用したわかりやすい丁寧な教員用、生徒用マニュアルを作成する。また、全生徒を対象としたオンラインレポート操作説明会を実施するが、その後は個別の対応が必須となることが予想されるため、教員研修も丁寧に実施していくことで、学校全体で組織的に対応していく体制を整える。生徒の学習が抑制または止まってしまうことがないよう、取組み状況を注視し、迅速な対応を行っていく。 (2)受講手続きに向けて、事務等とも事前の打合せを綿密に行うことで、当日現金徴収の過程も含め、手続きが円滑に進むよう体制を整える。
2	(幼稚・児童・) 生徒指導・支援	・生徒が安心して学べる教育環境を維持する。主体的に取組む意識の醸成をめざした教育活動の充実 ・生徒が自己を尊重し、自らの力を十分發揮できるよう個別最適化を図り、充実した学校生活の実現	○生徒指導規定やいじめ防止マニュアルの内容を全職員が理解し共通認識を持って指導を行う。 ○生徒が学校の規則を遵守し安心して学校生活を送れるよう、規則の周知徹底に努める。主体的に参加できる学校行事を充実させる。 ○より効率的な生徒情報の把握および職員間での共有に努め、生徒一人ひとりの教育的ニーズに沿った効果的で継続的な支援を行えるように一層の整備を行う。	(1)いじめ防止のため、いじめアンケートの100%の回収率を目指す。問題行動には早期発見・対応し、職員間で共通理解を持ち生徒指導を行う。 (2)学校ホームページ、通信紙・掲示物・校内放送などを通じて学校のルールを継続的に周知した。生徒が主体的に取り組めるよう学校行事の計画を見直した。 (3)教職員、SC、SSWおよび教育支援専門員等の情報共有においてデータベースを積極的に活用し、学習および生活上の支援を要する生徒への支援の充実化を図る。 (4)SC・SSWに併せてメンタ制度や外部機関等と連携し、相談者の分散を図り面談日程に余裕が生じる仕組みを整え、生徒支援の充実に繋げる。	(1)いじめアンケートは、昨年同様90%であった。対応が必要な事案は担任や関係グループと情報共有を行い解決に努めた。 (2)学校通信、校内放送等を通じて本校のルールを継続的に周知した。生徒が主体的に取り組めるよう学校行事の計画を見直した。 (3)教職員および関係者が様々な情報データベースに積極的に登録したか、会議や情報交換会、担任間の引継ぎなどの場面においてデータベースが活用されたか。 (4)SC・SSWに必要に応じて相談を受けさせることができているか。安心して相談に集中できる環境づくりなどの体制となっているか。	(1)残る10%の未回収分への働きかけについて、更に検討が必要である。また、多様化する問題行動への新たな対策を検討する必要がある。 (2)今後は学校のルールを生徒へ伝える方法を工夫し浸透できるよう努めていく。多くの行事を設け生徒が様々な行事に参加できるよう更なる工夫が必要である。 (3)データベースに積極的に登録することについては、ほぼ問題なく達成できている。 (4)SC・SSWとの連携や情報共有については滞りなくできている。SC・SSWの面談予約の際に教育相談コーディネータを通した事前相談の仕組みを取り入れることにより、各生徒に適切な支援をつなげることができやすくなっている。	(3)データベースの活用も引き続き検討してほしい。 (4)開校以来多様な生徒を受け入れながら、毎年課題を見出して進まれている印象である。今後も、外国につながる生徒の支援体制を整えてほしい。	(1)いじめアンケートは90%と昨年同様に維持し、対応が必要な事案は担任および関係グループと適切に情報共有を行い解決に努めた。いじめアンケートの未回収に対し働きかけが課題として残る。多様化する問題行動に対する新たな対応策の検討が必要である。 (2)生徒の安心・安全を確保のために学校通信や校内放送を通じて学校のルールを周知した。学校行事の計画を見直しは、生徒の学校生活への積極的な参加を促したと考えられる。学校のルールを生徒への伝達方法は、伝わりやすいひとつである。 (3)データベースへの情報の入力など登録についてはほぼ問題なくできている。今後は、情報をいかに活用し生徒の必要な支援につなげていけるかが課題である。 (4)SC・SSWとの面談の予約方法の仕組みを工夫することで解消されている。また、情報共有も滞りなくできた。今後は共有した情報を生徒支援に活かしていくことを考えていきたい。	(1)いじめアンケートは、担任を通じた継続的な声かけや、アンケート方法の見直し（デジタル化や時間確保の工夫）により回収率向上を目指す。 多様化する問題行動に対応するため、教員間での情報共有や研修を実施し対応を進めること。 (2)ルールの伝達方法について、生徒目線での工夫を加え支架や動画などの活用を検討する。学校行事はさらに多くの生徒が参加できるよう環境を整える。 (3)データベースの情報を常にアップロードしていく、その状況に合った支援を組織的に取り組んでいく方策を整える。 (4)単に情報を得るだけではなく、そこから問題点を洗い出し、生徒支援へつなげる様にSC・SSWとの関りを密にしていく。	

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月26日実施)	総合評価(3月25日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
3	進路指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が将来を考え、自分の適性に合った実現可能な進路選択を行い、行動できるようサポート体制の強化 生徒個々の可能性を広げ、社会的自立に向け、生徒が興味関心を持ち積極的に活動できる支援体制の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ○横浜中地区のインターンシップの参加者を昨年度より増やし、新しい知識や経験から視野を広げる機会とする。 ○進学アドバイザーの利用、各種説明会等の参加を増加させる。また、新しく、総合型・学校推薦型選抜対策、「進路・進学探求」というプログラムを実践する。 ○生徒の成長に寄与できる通級指導のあり方を探り、生徒一人ひとりが成長を自覚し、将来の自己実現に繋がるよう関係機関と連携し、一層効果的な支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)通信紙やGoogle Classroomの利用により、参加することの意義を周知する。 (2)Google Classroomを活用することにより、迅速に進学に係る情報を流していく。また、プログラムについては、具体的な運営の仕方を決めて、関係機関の担当者と協力して実践する。 (3)通級指導教室受講生等に早期のインターンシップ・就業体験等を行い、生徒・保護者の意向を確認し、スマーズな就労活動ができたか。 (4)生徒一人ひとりに必要な支援を行うための工夫ができたか。生徒自身が成長の振り返りを行って、自己認識することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)横浜中地区のインターンシップの参加者を昨年度より、増やすことができたか。 (2)進路説明会、総合型・推薦型入試説明会、進学面接試験ガイダンスの参加者が昨年度より増えたか。また、「進路・進学探求」プログラムをスマーズに運営できたか。 (3)担任等と連携し、生徒・保護者の意向を確認し、スマーズな就労活動ができたか。 (4)生徒一人ひとりに必要な支援を行うための工夫ができたか。生徒自身が成長の振り返りを行って、自己認識することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)参加者は増やせなかつたが、新たな取組みとして就職前インターンシップを実施し、自分に適した就職支援を実施した。 (2)卒業生対象のGoogle Classroomを活用し、情報を適確に伝えた。各進路説明会の参加者が昨年度より増えた。また、今年度導入した「進路・進学探求」プログラムを適切に運営できた。 (3)担任と協力しながら生徒の希望を確認しつつ、自立支援の会などを通じて保護者にも情報提供を行い、説明会や見学会などに積極的に参加し、円滑な就労活動ができるように支援した。 (4)通級指導の内容を工夫することにより生徒それぞれに必要な支援ができ、その都度、生徒自身が振り返りを実施し、自己認識につなげることができた。また、担当教員も振り返りを実施し、よりよい支援を模索した。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)参加した生徒から成果報告のあった横浜中地区のインターンシップの参加者を増やす努力を今後もしていく。また、就職後の退職率に大きな影響がある就職前インターンシップを実施した成果を踏まえて今後さらに検討する。 (2)「進路・進学探求」プログラムの参加者を増やすため、広報時期や保護者にも情報を提供していく。 (3)生徒の個性や保護者の希望に見合った就労先の候補が多数提示できるような工夫が必要である。そのためにより積極的に説明会や見学会に参加しやすいシステムを構築する。 (4)生徒の取り組みの様子の観察や生徒の自己評価を有効に活用し、個々に対して有効な支援の在り方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)就職前のインターンシップの取り組みは、とても良い。雇用側も働き手も、ミスマッチを防ぐのは良いこと。ハローワークなどの制限もある中で、どのように就職前のマッチングをいかに増やすしていくのかは重要になってくるので、今後も頑張ってほしい。 (2)(3)生徒達に将来自立して生きていくという意識を持たせてほしい。そのような生徒を一人でも増やすような取り組みをしていただきたい。今の時代働く気さえあれば就職はできる。転職は好ましくない。最低限の学力も必要である。 (4)卒業する生徒達を、どこにどのようにつなげていくのかを考えてもらえたらと思う。サポートステーションとの連携があるので、それを活かしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)横浜中地区のインターンシップの参加者からは成果報告があったので、目標であった参加数については来年度も重点目標としていきたい。新たな取組みとして就職前インターンシップを実施し、自分に適した就職支援を実施した結果、退職率に大きな影響があった点については学校関係者から高評価をいただいた。継続していきたい。 (2)進学・就職ともがガイダンスルームを利用した生徒は増え、就職内定32名、進学調査書発行数153で双方増加した。各進路説明会の実施や今年度導入した「進路・進学探求」プログラムの参加者を増やすため、予算化し、希望者が確実に活用できる環境を整えていく。 (3)生徒・保護者に対しての見学会・説明会の実施など情報提供はある程度達成できた。今後はより生徒の希望に添えるような活動を検討する必要がある。 (4)通級指導の内容や取り組みを工夫することにより生徒それぞれに有効な支援ができている。生徒の個別支援につながる指導を組織的に取り組めるような方策を引き続き検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)横浜中地区のインターンシップについて、事前説明会や修館通信、マイページのお知らせ等に載せ、周知活動を徹底して行うことで参加者数を増加させたい。また、就職前インターンシップについては、学校関係者評価項目に合った制約等問題点を考慮しながら来年度も引き続き取り組んでいきたい。 (2)卒業生対象のGoogle Classroomを活用し、進路未定者を減少させるための方策を検討していく。「進路・進学探求」プログラムの参加者を増やすため、予算化し、希望者が確実に活用できる環境を整えていく。 (3)サポートステーション等の外部機関と連携を取りながら、生徒それぞれの希望や個性に合わせた進路が見いだせるように学校と家庭とが一体となって支援していく。 (4)様々な取り組みや体験などとともに生徒自身の自己評価を実施することにより有効な支援の在り方を模索する。
4	地域等との協働	地域や近隣の小中学校等と連携し、協働の体制を構築することで、地域に貢献し、地域から信頼される学校づくりの推進	○活動機会の拡充に向けた情報交換をより円滑に行うための体制を検討するとともに、実施した活動を校内外へ向けて適切に発信していく。	<ul style="list-style-type: none"> (1)地域との協働に関する学校全体の年間予定や担当窓口を整理し、より円滑な情報交換体制を検討する。 (2)地域との協働に関する校内外への情報発信を行うことで、配信内容が多様化したか。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)学校全体の地域連携を一覧にまとめ、活動機会の拡充に向けた情報交換体制を検討できたか。 (2)様々な立場の職員が情報発信を行うことで、配信内容が多様化したか。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)地域の事業所での本校生徒の活動等、本校が地域と関係して行っている活動について一覧にまとめた。 (2)修館フックスを、学校全体で取り組めるように準備し、配信の数を増やした。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)作成した一覧表を基に、地域関連の行事を確実に実施する。また、活動の記録を学校紹介の場で活用できるようにする。 (2)担当グループ以外の方に更に協力してもらえるように働きかけていく。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)今年度はふるさと祭感謝している。引き続きご協力をお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)地域の方の学校見学、地域だよりの作成と配付、地域の事業所での本校生徒の活動等、本校が地域と関係して行っている活動について一覧にまとめた。 (2)地域のふるさと祭や老人保健施設でのクリスマス会等への参加の様子など他グループの教員にも修館フックスを作成してもらい、効果的な情報発信をすることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)あらためて地域の方々の協力が本校の教育活動に欠かせないということを認識することができた。この一覧表を更新し、さらに活動を広げていく。 (2)修館フックスの作成についてはまだ、職員全体には至っていない。更に丁寧な広報活動を行い、これまで以上に情報発信していく。
5	学校管理 学校運営	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の自己実現に向けた主体的な活動をサポートする環境整備とサポート力の向上 教育環境の変化によりよく対応しようとする教職員体制の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の学習環境の向上を目指し、スクーリングのオンライン配信に向けた機器と学習室等の整備を進める。 ○予想されるさまざまな災害に即応できる教職員、生徒の意識向上を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)ライブカメラの試験的な運用を通して、より学習効果の高いスクーリングを行えるよう使用法や機器の選定を通して生徒に還元できるよう努める。 (2)アンケート調査を行ったり、アクセス数がどの程度であったか。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)オンラインスクーリングの視聴数と生徒の満足度がどの程度であったか。 (2)防災意識を高められるよう、訓練以外でも定期的に防災情報を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)試験運用により導入機器の選定の方向性が定まってきた。リアルタイムの配信よりも、出席できなかった場合や復習での利用が1回あたり10件以上あった。 (2)防災DIG演習やシェイクアウト訓練の参加者が約350名だった。今後はアンケート回答の有効的な活用法を模索する。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)通信制の特性上、スクーリングのアーカイブ化を中心とした促進を検討していく。 (2)シェイクアウト訓練の参加者が約350名だった。今後はアンケート回答の有効的な活用法を模索する。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)スクーリングのオンライン配信については、試験運用の状況から生徒の利用数は多くはないが、登校してのスクーリング参加が困難な生徒への学習機会の提供を追求する必要がある。 (2)防災訓練の実施日における登校生徒については概ね参加が見られたが、振り返りまでのフィードバックが不十分であった。訓練の組み立て方によると思われるため改善の必要があることがわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> (1)試験運用の学習室と同じ仕様の学習室を増やし、より多くのオンライン配信が可能な環境整備をすると同時にeラーニングシステムとの連携が円滑にとれるようしていく。 (2)防災訓練の一連の流れが終わった後で振り返りをしておくよう促すのではなく、一連の流れの中で振り返りをする時間をとることや、訓練以外での防災意識を向上させられるような情報発信をしていく。 	

